

# 草庵仏教

第219号  
(発行日)

2008年9月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

## 《開法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日  
午後3時より。

○真宗共学会——毎月2日と  
12日。午後7時より。

\*8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます

## 仏法の深さと歴史

釈尊(釈迦)は二五〇〇年ほど前にインドに出られた聖人で仏教の開祖であるということとは、よく知られている。だから仏教は二五〇〇年前に成立した教えであるという理解も間違いはなからう。

そうすると中には「二〇〇〇年以上も前の仏教などはもう古い。現代には通用しない。世の中は年々発展しているのだから」というような話を聞くことがある。

本当に、仏教が説く二〇〇〇年以上前の釈尊の教えはもう古くて役にたたず、現代には通用しないものであるのか。

この世界の文化は年々発展し続けてきたのであろうか。確かに、昔は牛や馬に載せて物を運んでいたのが現代はトラックで運ぶ。江戸時代は手紙を飛脚によって運んで何日もかかったが、現代は電話やメールで即座に通信することができる。戦後になってからでもさまざまなものが発展し

た。戦後しばらくまでは、洗濯は洗濯板でゴシゴシ洗っていたのが、今や洗濯機で短時間で洗って乾かすことが出来る。また医学の面でもその進歩は大きい。結核は昔は不治の病だったがマイシンの発明で治るようになり、白内障も簡単な手術で元のクリヤーな視界を回復することできるなど、年々発展していくものばかりがない。

しかしながら、こうした発展は自然科学や科学技術分野でのことである。それ以外の文化は必ずしも時代とともに発展してきたとはいえない。

では、社会科学の領域はどうかといえば、例えば、政治システムや政治体制はだんだん進化し良くなっていくと一応いえるようである。しかし、それも絶対的ではない。奴隷制の古代社会や封建的な身分制社会よりは現代の民主主義社会は良くなったといえる一面、二十世紀には一億人以上

が戦争で亡くなったし、あるいは大虐殺があったカンボジアのポルポト時代などは、むしろ中世の時代の方が平安でよりよき時代であったといえないこともない。だから政治上、すなわち社会科学の領域になると、必ずしも時代によってより善くなり発展してきたとはにわかにはいえない。

さらに芸術文化などにおいては、過去の時代の方がすばらしい作品が生んだということとは決して珍しくない。

クラシックでいうと、私はバッハが大好きだが、バッハ・モーツアルト・ベートーベンは十七世紀から十八世紀の作曲家である。彼らのすばらしい作品に比して、現代の作曲家の作品がより内容の充実した曲などとはいえない。バッハのバイオリンやチェロの曲一つをとっても、彼以後の誰も作れないような極めて密度の高い作品を残している。

絵画もそうである、ミケランジェロやダビンチやレンブラントに匹敵するような画家が彼ら以後に出て来ていな

い。このように、芸術などは、時代と共に進展しているとは決していえない。

そして、精神文化ないしは宗教文化の領域においては、釈尊のおられた今から三〇〇〇年前から二〇〇〇年前の間は、人類の歴史上最も優れた聖人や賢人を出している。釈尊・イエス・孔子・ソクラテスなどはその代表である。彼らが降り立った精神の深みは、その後の誰も到達し得ないような豊かな深みに達したといえよう。現代においては精神文化の深さや豊かさは内容的むしろに痩せているともいえる。(了)

## 《秋季彼岸法要》

9月22日(月) 午後2時始

法話 ソナム師(カトマンズ本願寺)

「チベット仏教から真宗へ」

日本の仏教の歴史においても、鎌倉時代の法然・親鸞それに道元や日蓮などの祖師方の到達した精神の深みと豊かさを凌駕するような人物が、その後の日本史の中に出てこない。

なぜ芸術とか宗教の領域などでは、科学技術のように時代が経るに随って発展することができないのであろうか。

それは自然科学や科学技術は、先人の功績や業績や発明などの上に後の人がプラスしていける文化だからである。たとえば、白黒テレビができたから数年でカラーテレビができたのは、白黒テレビの技術の上で、さらに新しい技術を加えることができるからである。物理学の理論でも十七世紀にニュートン力学が生まれて物理学が飛躍的に進んだが、そうした物理学的成果の積み重ねをふまえてのみアインシュタインの相対性理論や量子力学が生まれた。いわば先人の業績を自らの知識とし、その上にさらなる発見や発明を加えることができるのである。それが科学とか科学技術の領域の特質である。

ところが、芸術とか宗教などの領域は、過去の偉人の達したレベルを後から生まれた人がプラスできるかというところはほとんどできない。ちょうど、親が人間国宝の作家だからといって、その子供が親の技能をそのまま受け継いで、それに自分の力を足してさらに上達していけるかというところはいかにない。自分では自分で一から技能を身につけなければならぬ。

同様に、先人が修行して高いレベルの悟りに達しても、後の人は一から修行しなくてはならない。先人の境地を参考にすることはできても、先人の到達した精神の深みの上に自分の修行の成果を重ねることはできない。

そのように、釈尊がインドの精神文化が非常に高揚した時代に生まれ、しかも誰もできないうような厳しい修行に堪えて、ついに前人未踏の深い悟りの境地に達した。だからその悟りの境地を後の人が自分の修行によって追体験することは非常に難しいことである。

て快適な書齋でたくさん思想書を読んで、考えて仕上げた思想や考えのレベルが、釈尊が数十年に渡る清らかで厳しい修道生活にもとづいて体験し熟成されていった精神の領域に、経験的にどれほど近づき了解することができようか。また、2000年前の熱烈な信仰の時代に生まれたイエスキリストの神経験にしても同じであろう。現代の人の神経験でもとても及ばないほどの深い神経験をしたにちがいない。だから聖書におけるイエスの言葉には非常なる深みがあるであろう。

そういうように、過去の聖者や賢者の精神性の深さは時代が下るに随って深まるというわけには簡単にはいかない。むしろ、釈尊やイエスの時代の方が深いレベルに達したと言い得るのである。

だから、釈尊の言葉である經典の内容は、2000年以上前の、幼稚な科学技術の時代の産物と同じ意味で幼稚な思想でもなければ宗教経験でもない。

むしろ、今日のような物質文明が爛熟し、人の心が外へ外へと散ってしまいがちな時

代には到底感知し得ないような精神の領域を、釈尊とその時代の賢者たちは感知したのではなからうか。それらが經典となり、聖書となって今日まで伝統されてきたのである。

だから仏教は昔の思想であり教えであるから古いとか価値がないとかは決していえないのである。

そしてもう一つ付け加えておきたいことは、釈尊の「真理を知る知り方」は「無分別智」という悟りの智慧によって知られた真実である。釈尊が悟られた真実は、知る側と知られるものとが一つになつて知る、いわゆる無分別智において知られた真実といわれている。だから釈尊の説かれる真実は、ものごとを対象化し、見る自己の側に対して、外にもものごとを置いて考えるという分別的知性の産物ではない。

それに対して、科学的な物の考えや知り方はすべて分別的知性によって知られたことからである。ものごとを観察し、分析し、分類し、応用していくような、いわば対象に対して分別を加えて知るとい

う知り方である。

このような科学の分別的な「知」と釈尊のような禅定のなかでの無分別智による「直観智」とは質が違ふ。

分別的知性によって知られた資料や知識は積み重ねが出来、先にのべたように後に学ぶ人はそれを自分の知識として蓄積でき、その上に自分の研究を重ねることが出来る。しかし直観的に知られた真理は、自分自身が一から体験的に、同じ直観智によって得なければ知られない事柄である。そういう意味で、科学の知と宗教の智とは違いがある。

そのような直観智によって知られた真実を説いたのが經典であり、仏教である。そして、直観智によって悟られた真実は、時代を超えた普遍的な真実である。増しも減りもしない、変わらない真実であつて、釈尊の時代においてもその真実は働いており、現代にも普く働いている。そうした真実を説いているのが仏教である。だから何時の時代に於いても古くならず、さびも付かず、色あせないものである。

# 正信偈に学ぶ問答

(八)

## 建立無上殊勝願

## 超発希有大弘誓

## 五劫思惟之摂受

(正信偈書き下し)

無上殊勝の願を建立し、  
希有の大弘誓を超発し、五  
劫に之を思惟し摂受せり。  
(現代語訳)

この上なくすぐれた願をお  
たてになり、世にもまれな大  
いなる誓いをおこされ、五劫  
もの長い間思惟してこの誓願  
を選び取られた。

\*

H 「法蔵菩薩は無上殊勝の願  
を建て、希有の大弘誓を發さ  
れた、といわれていますが、  
無上殊勝の願とはどういう意  
味ですか」

D 「この上なきすぐれた願の  
ことです。法蔵菩薩は諸仏  
の願いに超え勝れた願いを建  
てられました、それが法蔵菩  
薩の本願つまり弥陀の本願で  
あります」

H 「諸仏というのはどう理解  
したらいいでしょうか」

蔵菩薩が建てられた願  
いは、諸仏の願いに超  
え勝れていてこの上な  
き願いであるというこ  
とです」

H 「それはどのような  
願いですか」

D 「一切衆生に平等の悟りを  
えさせたいという願いで  
あり、そういう願いを成就する  
世界を打ち立て、そういう世  
界に至らしめたいとの願であ  
りましょう。いわゆる一切衆  
生を仏にし、仏になるような  
世界を成就したいという、そ  
ういう願いです」

H 「その場合、平等の悟りを  
得る、いわゆる仏になるとい  
うことはどうなることか、も  
う少しお話し下さい」

D 「真実をさとり一切の煩惱  
の罪濁が浄化されて、量りな  
き智慧と慈悲が完成した方を  
仏といいます。それゆえ仏は  
いのち量りなく、大いなる安  
らぎを実現したお方であると  
ともに、他の生きとし生ける  
悩める衆生を同じ仏にすべく  
働きかけて止まない利他の徳  
を完成しておられる方です。  
そういう仏に一切衆生をなら  
しめたいと願い、それを成就  
する領域である浄土を完成し  
たいという、そういう願ゆえ

にこの上なき願いというので  
ありましょう」

H 「そういうような願いはこ  
の世間の中のどんな教えにも  
なく、どのような道徳の教え  
にもない広大な願いですね。  
では希有の大弘誓とはどうい  
う意味でしょうか」

D 「これは無上殊勝の願をさ  
らに讃嘆されたお言葉であつ  
て、別のものではないと思ひ  
ます。いわゆる如来法蔵様の  
誓願は、希有な誓いであり、  
広大な誓いであると讃えてお  
られるのです」

H 「なぜ希有でしょうか」

D 「法蔵菩薩の誓いはすべて  
のものが、そのありのまま  
落ち着ける法であり、どのよ  
うな条件もつけずに、ありべ  
のままに浄土に生まれ、仏に  
したもう不可思議な大悲の誓  
いだからです。四十八願を無  
上殊勝願とすれば、その中の  
第十八願の徳を希有の大弘誓  
と讃嘆されたのでありまし  
ょう」

H 「第十八願は、一切衆生を  
その存在のままに落ち着きを  
与え、涅槃の世界に至らしめ  
る、そういう道が説かれてい  
るのですね。だから希有であ  
るといわれるのですね」

D 「ええ、そう思います。」

H 「では、一切衆生をありべ  
のままに救うてくださる思し  
召しは第十八願にはどのよう  
に説かれていますか」

D 「それはまた後に詳しくお  
話しすることがあると思いま  
すが、第十八願に「乃至十念  
せん、もし生まれずば正覺を  
取らない」という如来法蔵様  
の誓いが説かれています。そ  
れは「たつた十声なりとも我  
が名を称えるばかりで、もし  
汝が浄土に生まれることが出  
来ないようなら、私は正覺の  
座、すなわち仏には成らない」  
との法蔵菩薩の誓いです。こ  
の誓いには人間のあらゆる相  
も性格も能力も問わず、まる  
まる引き受けて助けるという  
大いなる広い大悲の誓いが表  
されています。それゆえ大弘  
誓と讃えられるのではないで  
しょうか」 (了)

## 《休会のお知らせ》

九月十二日の念仏会  
と共学会は休みます

# 信心夜話

《松並松五郎念仏語録に聞く》七  
太字は松並さんの言葉。

\*

○説教聞くべからず

仏願の生起本末を聞くべし

弥陀の誓約を聞くべし

南無阿弥陀仏

(世間の説教のほとんどは仏法の入り口まで連れてくるだけの教え。仏法聴聞の要である仏願の起りりと結果、大悲の約束を何度も何度も聞くべしとおさとし)

○我々は、うかうか聞いていますが、称えるまま、聞いていますが、この一声の中に、阿弥陀様の生命、かぎりなき御体、生血がこもっておりますぞ。

(一声の念仏の中に無量のまことがこもっている。一声の念仏が阿弥陀仏そのもの。阿弥陀仏のいのちも慈悲もみなこもっている、との仰せ)

○ある人「そんなに念仏ばかり申さずにお経様でも読まれたらどうですか」  
はいはい 南無阿弥陀仏 南無阿弥

陀仏 一切経読みづめです。南無阿弥陀仏

(仏の法とはいのちはかりなく光はかりなきまこと。その光の働きを智慧と慈悲で表されている。それを説いたのが一切経であり、それが一句に納まっているのが南無阿弥陀仏であろう。南無阿弥陀仏を信受して称える人は一切経に説かれたまことを身をもって読んでいるのに同じとわいていいのである)

○こちらから阿弥陀様の方へ、向かって行く様に思っているが、そうでない。阿弥陀さんが私に向かって来て下された南無阿弥陀仏。

(今私のところにまですでに来て下さっている阿弥陀仏が今のお念仏とは。ようこそようこそ)

○「唯念仏して弥陀に助けられまいらすべし」と「よき人の仰せを蒙(こうむ)りて」。この唯は唯でも、唯ならぬ唯である。私等の唯は軽い。唯念仏の数さえ積みばよい事の様子に思っているが、そうでない。一声一声を聞け。唯はたったこれ一つと言う事。言いかえたら、総てをなげうった言葉が、唯念仏してという御心。二十年の修行も、知恵も、地位も、何もかもなげうった

姿でしょう。罪も悪業も、何もかも許された言葉である。唯とは、何もかも出来上がった一切経が、この唯の中に入っている。

如来様の御心を、頂いて頂きぬかねば、この「唯念仏して」と言う言葉は出ぬ。唯と申す言葉の中に、ひざまづいてござるお姿が見える。我々は宗祖のお言葉をそのまま頂くべきである。

(唯念仏、唯念仏と簡単に言ってしまったが、「唯」の中には聖人様のご生涯の結論と如来様のご苦勞の全てがかかっている唯なのです)

○私に出来ることは出来る。出来ない事は出来ぬ。分からぬ事は分からぬ。分からぬことを分かるうとするよりも、判った御方の仰せを聞けばよい。私に出来る事に成就なし下された道に進めばよい。阿弥陀様が判ってござるから、仰せのまま念仏申せばよい。結果は南無阿弥陀仏に仕上がってあるのや。聞けばよいのや。頂けばよいのや。頂くとはいは随うこと、受け入れることや。この声を聞くのや。南無阿弥陀仏

念仏は往生の用意に称えるのでない。往生の用意が出来上ったさげびが南無阿弥陀仏。

(宿業の身ゆえに善き行は出来ないことが多い。出来ないことを無理にしよ

うとするよりも、今出来るように与えてくださっている大善大功德のお念仏をいただいて、これを称えこれを聞く。また、愚かな凡夫が、頭をひねって助かる道をつかろうとするが、分からぬ。自分の知恵では分からぬと知って、私の助かる道を本当に分かっているお方の仰せに随えばよい。私の往生はずで阿弥陀仏がすべて仕上げてください。て、「汝を浄土に生まれさせる、助けろぞ」とよびかけたもう。そのお声を聞くのである)

○どんなに尊いお方様でも、私の後生を案じて下されたでなし、御修行なし下されたお方でもなし、御浄土建立なし下されたお方でもない。そんなお方のご法話を聞いて、迷うことはない。私の為にとて御苦勞なし下された仏の仰せに随えばよいではありませんか。その御法話を尊いお方に聞けばよい。御法話の頂上はお念仏です。仏様の御説法ですもの。「救うぞや」、それが南無阿弥陀仏。仏様直々の呼び声であります。南無阿弥陀仏

(私の後生を心配し、私のために浄土を建立し、浄土への道を仕上げ下されたお方(仏)の仰せを聞かずに、浄土を持たぬ人間の話を聞く方に力を入れてい。仏の仰せを、最初は善き人の説法から聞くのであるが、至上の説法はお念仏。お念仏は阿弥陀様直接の

説法。この直説法を軽んじてはならぬ  
(了)

雑記帳